

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	陽成院一宮姫君歌合の本質 : 陽成院関係の歌合及び返歌合として
Author(s)	顧, 宇豪
Citation	表現技術研究 , 17 : 1 - 12
Issue Date	2022-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/52322
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052322
Right	
Relation	



陽成院一宮姫君歌合の本質

―陽成院関係の歌合及び返歌合として―

顧 宇豪

はじめに

天曆二年（九四八）九月十五日庚申、陽成院の命を受け、一宮の大君と中君は「秋の果ての心」のある古歌に返答して合わせた。これが、陽成院一宮姫君歌合である。

本歌合の特殊性を挙げると、その一つは陽成院関係の歌合、即ち陽成院歌合（夏虫恋）、陽成院歌合（惜秋意）、陽成院親王二人歌合という歌合の系列に属することである。もう一つは、珍しい返歌合の形式を採用したことである。返歌合という歌合の形式は、延喜二十一年（九二一）の京極御息所歌合で初見され、その次に本歌合がある。そのため、先行研究の『平安朝歌合大成』⁽¹⁾（略称『大成』）と岸本理恵氏による注釈⁽²⁾では、両歌合の継承関係が指摘された。更に、『大成』は、本歌合の史的評価について、

本歌合は返歌合という様式において京極御息所歌合の系列に立つものといえよう。しかし、京極御息所歌合がその日の現実に生きた贈答歌であるのに対して、本歌合は、古歌に対して、その心を返しているところに、当世的ではない陽成院関係の歌合特有の

感傷が見られるようである。しかし、用語修辭の点においては本歌を忠実に取り、歌の心においては、本歌に賛同するというよりは寧ろ反対することが多いという点では、明らかに京極御息所歌合におけると同じ傾向を示している。歌合史の流れの中で、本歌合が大いに、京極御息所歌合の影響を蒙っているということは考えられてもよいであろう。

と述べたように、両者が返歌の手法などの面においても密接に関係することを示唆した。本稿では、陽成院関係の歌合と京極御息所歌合に次ぐ返歌合という二つのルートを辿りながら、本歌合の本質に迫りたい。

一 成立背景

十卷本⁽³⁾冒頭仮名記に、

陽成院、九月十五日庚申ありけるに、一宮大君中君左右の頭にて、秋の果ての心ある古歌の返しを左右として合せたまふ

とあるように、本歌合は陽成院が主催したのである。開催時期の九月十五日庚申に関して、陽成院の在世中に元慶五年（八八一）と天曆二年（九四八）⁽⁴⁾が相当するので、天曆二年に確定できる。陽成院は天曆三年（九四九）九月二十九日に崩御するので、本歌合は陽成院が崩御する約一年前のことである。開催場所は、陽成院の御所に当たる冷然院であろう。

「一宮」について、一般的に元良親王だとされる。『大和物語』百三十九段及び『元良親王集』の冒頭に元良親王が陽成院一宮と称されているためである。ただ、元良親王は既に天慶六年（九四三）七月二十六日に五十四歳で薨じた。

そして、「大君中君」という元良親王の娘に関して、系図などの史料では一切記録されず、本歌合の関係資料にのみ見られる。『大成』にいう、図書寮典籍解題は大君を「明子女王」としている。当該人物も未詳である。記述を見る限り、一人の姫君は恐らくまだ女童なので、一応年齢を十〜十五歳、生年を承平四年（九三四）〜天慶二年（九三九）と推定する。姫君たちの生母に関して、元良親王の正式な配偶者（神祇伯藤邦隆女・醍醐第八皇女修子内親王・宇多第七皇女誨子内親王）⁽⁵⁾の内に、修子内親王が既に承平三年（九三三）二月五日に薨じたので、その次の妻誨子内親王（天慶六年十二月十四日薨）が該当する可能性は高い。誨子内親王に関しては、『大成』によれば、延喜十三年（九一三）三月十三日の亭子院歌合に左方の頭として出席しており、同年八月の亭子院・女七宮歌合にも参加したと思われる。姫君たちの生母を誨子内親王に想定すれば、姫君たちは宇多院の血筋も引き継いでおり、かつ母からも才能を受け継いでおり、宇多院関係の歌

合に属する京極御息所歌合との因縁が浅くないようである。

当時では史上最年長の天皇⁽⁶⁾となる陽成院が最晩年において孫娘を召集して歌合を催すのは興味深い。陽成院主催に関して、山下道代氏⁽⁷⁾は、崩御の前年に当たるとの理由に、陽成院の主催を疑い、故元良親王関係の人々による主催だと主張する。確かに、庚申の徹夜は、最晩年の老人に悪影響を与えると想像が付くが、『国史大辞典』⁽⁸⁾の「庚申信仰」条によれば、

三戸説を日本に請来したのは円珍だとするのが以前の説であるが誤りで、円仁の『入唐求法巡礼行記』承和五年（八三八）十一月二十六日条から推して、おそらく八世紀の後半ごろには伝わっていたと思われる。伝えたのは、密教僧か留学生であろう。三戸説は、平安時代の貴族には老子の説いた「延齡之術」（『江吏部集』）として受け容れられ、天皇中心もしくは貴族のあいだでしきりに行われた。御庚申や庚申会がそれである。道教では、身をつつしんで静かに夜明かしをせよと説くのに対して、日本では睡気ざましや時間をつぶす手段として、双六・管絃・歌合その他の遊びをし、酒を飲んで賑やかに徹夜した。

とあるように、当時の庚申信仰とは逆に健康長寿のために厳格に徹夜を守らなければならない所があるので、年齢を理由に陽成院の参加不可を断定できないであろう。そして、故元良親王関係の人々による主催に関して、冒頭仮名記に元良親王を「故一宮」と表記しておらず、その薨去を全く言及していないので、元良親王関係者が主催したとは思えない。この時に、陽成院の臣下に降した長男源清蔭は、まだ在世中（天曆四年七月三日薨）で、その風流の姿が『大和物語』などの文

献で記録されており、本歌合を主催する可能性もあるが、姪たちとの親交を考えると、やはり陽成院を介する必要があるであろう。いずれにせよ、本歌合の成立に関して、陽成院は必要不可欠の存在だと思う。一般的に、陽成院関係の歌合は身内による私的な歌合とされているが、本歌合はきちんと記録されており、伝本や他書所伝が少なくないので、やはり陽成院の特別な地位による公的な影響力と関係していると考えられる。以上の背景を理解した上で、本歌合の内容に対する分析に進む。

二 本歌について

本歌合は返歌合という形式で行われた。そのため、基本的な構造は、本歌一首と返歌二首のようなユニット、即ち「一番」で連結されている。本歌合は全て十七番で構成されている。ただ、一番目の右歌の三・四・五句と、二番目の右歌一首が欠落している。本歌合の配列の一覧表⁹⁾は、以下のようになっている。

廿陽	十		本／返	番
	陽	書		
1	1	1	本	一
2	2	2	左	
3	3	3	右	二
4	4	4	本	
	5	5	左	三
	6	6	右	
7	7	7	本	四
8	8	8	左	
9	9	9	右	五
10	10	10	本	
11	11	11	左	六
12	12	12	右	
13	13	13	本	七
14	14	14	左	
15	15	15	右	八
16	16	16	本	
17	17	17	左	九
18	18	18	右	
19	19	19	本	十
20	20	20	左	
21	21	21	右	一一
22	22	22	本	
23	23	23	左	一二
24	24	24	右	
25	25	25	本	一三
26	26	26	左	

本歌合の本歌は、

廿陽	十		本／返	番
	陽	書		
27	27	27	本	十
28	28	28	左	
29	29	29	右	一一
30	30	30	本	
31	31	31	左	一二
32	32	32	右	
33	33	33	本	一三
34	34	34	左	
35	35	35	右	一四
36	36	36	本	
37	37	37	左	一五
38	38		右	
39	39		本	一六
40	40		左	
41	41		右	一七
42	42		本	
43	43		左	一八
44	44		右	
45	45		本	一九
46	46		左	
47	47		右	二〇
48	48		本	
49	49		左	二一
50	50	50	右	

- 1 月影の山下までにさやけきは夜も紅葉の色を見よとや
 4 小夜深く恋する鹿の声聞けば我さへあやな袖のひつかな
 6 山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば
 9 秋山は唐紅になりにけりいくしほ時雨ふりて染めけむ
 12 佐保山のははその紅葉散りぬべみ夜さへ見よと照らす月影
 15 佐保山のははその色は薄けれど秋は深くもなりにけるかな
 18 人恋ふる心はそらに通へばや空も涙もともにしぐるる
 21 あしひきの山路は秋ぞ惑ひける積れる紅葉跡しなれば
 24 時雨ふり紅葉の見する山里は住みし人さへうつろひにけり
 27 秋山に心をのみもいるかな紅葉の色の深きまにまに
 30 紅葉葉は霧の立つにも散りけるを風を刀と思ひけるかな
 33 秋風は雲の上まで吹き昇れ月の桂の散り散らず見む
 36 ゆく秋を招く尾花の袂には露も置きあへずのどけからねば
 39 散らねどもかねてぞ惜しき紅葉葉は今日を限りの色と見つれば
 42 音にのみ聞き渡りつる秋の夜の長さを独り寝てぞ知りぬる

45 独り寝る夜を長月の花薄そよとも秋の風ぞ答ふる

48 紅葉葉の散り交ふ駒のあまたあるをいづれに乗りて秋をとど

めむ

と計十七首ある。冒頭仮名記によれば、以上の歌は「秋の果ての心あ

る古歌」として選出された。本

歌の出典について、『大成』が

言及したのは以下のようにな

っている。

以上のように、二一番歌を除

けば、判明された出典が基本的

に『古今和歌集』前後に集中し

ていることは分かる。これは陽

成院関係の歌合の共通点とも

言える。例えば、陽成院歌合(夏

虫恋)の初番、

1 いたづらに身はなるてへど夏虫の思ひはえこそ離れざりけれ

2 身を捨てて一つ思ひに焦がれたる心ぞ夏の虫にまされる

は明らかに『古今和歌集』恋歌一・五四四、

夏虫の身をいたづらになすこともひとつ思ひによりてなりけり

を参考しているのである。従って、本歌合の本歌の選定は陽成院関係

の歌合の伝統を継承したのだと考える。そこには陽成院一門の主流歌

壇に対する一貫とした敬仰の姿勢が管見できる。

一方、京極御息所歌合の場合、本歌・返歌を問わず、『古今和歌集』

との関連が見られず、用例と思われる歌さえほとんど見当たらないの

である。京極御息所歌合の本歌は躬恒に代作されたものもあり、やはり主流歌壇の最先端として、『古今和歌集』などの既存の歌集を参考せずとも創作できたのであろう。そこには京極御息所歌合の歌壇での高い立ち位置が窺え、二次創作を主にした本歌合は到底それと比肩できないのである。

また、本歌の形態は、典拠との異同がある。例えば、六番歌の場合、

歌自体は宗子の代表作で、『百人一首』にも収録されているが、『古

今和歌集』では冬歌に分類されており、秋の歌ではないのである。し

かし、陽明文庫十卷本に、

古今やまさとはあきこそことかなしけれひ

とめもくさもかれぬとおもへは

とあるように、本文の異同を示している。その返歌、

7 大方の秋はあはれの深ければ山里ならでなほぞかなしき

8 山里はいつもわかじいとどしく秋は鹿こそかなしからめ

を確認するところ、「秋」「かなし」の表現は、明らかに異同本文の

「あきこそことかなしけれ」に従っていると考える。また、十八番

歌の典拠と思われる『貫之集』の六〇二番歌も、

君こふる涙は秋にかよへばや袖も袂も共にしづるる

とあるように、構造的には近似しているが、異同が目立つ。それから、

三九番歌の場合、「今日を」は、廿卷本・『古今和歌集』・寛平御時

后宮歌合では「いまは」となる。返歌の左歌、

40 秋深き山の紅葉もあるものをいまはの色と思はざらなむ

を参照すれば、「いまは」の方が本歌合に採用された形だと考える。

こうした異同について考えられるのは、本歌の採用自体が典拠から

歌番号	出典
6	古今和歌集・冬・三一五 宗子集・一五
9	寛平御時中宮歌合・一三 左兵衛佐定文歌合・一五
12	古今和歌集・秋下・二八一
15	古今和歌集・秋下・二六七
18	貫之集・六〇二
39	寛平御時后宮歌合・九六 新撰万葉集・一〇五 古今和歌集・秋下・二六四

厳格に引用していないからかもしれない。その点は、京極御息所歌合とは大きく違う。京極御息所歌合では、

本 躬恒

10 ちはやぶる春日の原にこきまぜて花とも見ゆる神の禱部かな

左勝

11 春日野の花とはまたも見えぬべし今こむ春のかざしがてらに

右

12 春霞たちまじりつつゆくからにあだにも花と見えにけるかな

右方、時に原といふ文字を過ちて野辺に書けり。ここに問ひて曰く、「これを承る人、題の心を違ふるは負けとして読まず。されば右方の負けなり」。忠房奏して曰く、「かの原といふ文字、じちは野辺といふあざななり。されど右劣れり。まされるかさねて持ぞ申すべし。」仰せに曰く、「申す旨さにあらず、言の理つきず。」先に仰するなむ、例忠房舌を巻き、頭を垂れて、やや久しくありて、「言の理あたるどころよろしくしてしかるべし。」とて、「さらにその理をせよ。」とて、右方負けになりぬ。右方は読みだにも読ませず

とあるように、当該番の判詞では、右方が「春日の原」を「春日の野辺」と誤記したということが起きた。それに対して、判者の忠房が見逃そうとしたが、主催者の宇多院が看過せず、右方を負けと判定した。つまり、京極御息所歌合の場合は、本歌の引用に対して、極めて厳格となっており、本歌合のような本歌とその典拠との異同を許さないはずであろう。その点において両者の性格の違いが示され、本歌合は随

意的な一面があり、京極御息所歌合との格の違いを管見できる。

因みに、典拠のない本歌について、憶測としか言えないが、陽成院及び陽成院一門の歌も含んでいると考える。陽成院の長い生涯を考えれば、早年の詠歌の成立時期は『古今和歌集』と並べられるので、「古歌」と称されるのも可能であろう。まして、既存する陽成院関係の歌合が三つあり、一門の和歌創作活動によって蓄積された歌も数多く存在していたと推測できる。陽成院関係の歌合の伝統を継承した本歌合において、陽成院の歌を本歌として出されるのも理に合おう。特に四八番歌のような、紅葉を駒に譬えて、それに乗って秋を留めるという奇特な発想を用いた歌は、陽成院の馬好きという個人色を顕著に表しており、『日本紀略』⁽¹⁰⁾天曆三年四月十五日条「戊子、依仰御馬一匹、奏覽陽成院也」によれば、陽成院の崩御直前まで馬を愛しやまなかつたのである。「駒」に関する表現は、陽成院の馬好きと合致している。更に、末句「秋をとどめむ」は、恰も陽成院歌合(惜秋意)に頻出した「とまらぬ秋」の表現と類似している。従って、四八番歌は陽成院の作として、本歌合乃至陽成院関係の歌合を括ったと考える。

また、四二・四五番歌が、叙景的な三九番歌から、一気に恋歌に向転換したことに注目すべき。この二首の本歌の主題は、陽成院親王二人歌合の「寢覚めの恋」の題と類似しているのである。つまり、本歌には元良親王らと関係する歌も含んでいると考える。

なお、三十番歌のような風を刀に譬える独特な表現を用いた歌が存在し、岸本氏によれば、当該歌の発想は、『和漢朗詠集』(上・冬・歳暮・白居易)⁽¹¹⁾の、

寒流帯^レ月澄如^レ鏡、夕吹和^レ霜利似^レ刀(江樓宴別)

から得たという。そして、それに続く本歌の三三番歌は「月の桂」という中国神話の題材を用いた歌である。こうした漢詩文に対する関心は、陽成院歌合（惜秋意）の歌題「惜秋意」からも垣間見える。

以上のように、本歌合における本歌の選定は、陽成院関係の歌合の伝統をしっかりと受け継いだように見える。「秋の果ての心ある古歌」を本歌の主題にするのも、陽成院歌合（惜秋意）の歌題「惜秋意」と通ずる所があった。京極御息所歌合の本歌のような、宇多院賛美という明白な主題に沿う独創的な歌とは大きく相違し、格式も一段に劣っている。そもそも、超高齢の陽成院に向ける長寿を祝う歌があつてもおかしくないが、一切存在しておらず、やはり参加者が身内だから陽成院に対する忖度も必要とされていなかったのであろう。その上に、典拠との本文異同が目を引き、本歌合の随意的な、漫然とした性質を物語っている。実は本歌の選定は、恐らく事前に決定されていたのではなく、返歌と連鎖しながら、歌合の進行に伴って即興的に出されたのだと考える。その構造を理解するために、まず次の返歌に対する考察に移りたい。

III 返歌にこころ

本歌合は一つの本歌に対して、左右方がそれぞれに返歌をするという、「本歌一首＋返歌一首」の基本ユニット「番」で構成されている。そのため、一つの番の内に、まず本歌と返歌との対応関係が見られるのである。例えば、四番の、

9 秋山は唐紅になりけりいくしほ時雨ふりて染めけむ（本）

10 時雨つつ紅深く山の端も秋果てゆけばかひなかりけり（左）

11 いくしほも時雨はふらじ佐保姫の深く染めたる色とこそ見れ

（右）

とあるように、本歌の「秋山は唐紅になったなあ。幾度時雨が降って染めたのであろうか」に対し、左歌は「時雨が降りながら、紅葉の色が深くなる山の端も、秋が果てていくので、甲斐がないことよ」、右歌は「幾度も染めるように時雨は降ったのではないだろう。佐保姫が深く染めた色なのだと見えることよ」と返した。

ただ、注意すべきなのは、このような返答が贈答歌として成立しない点である。そもそも、本歌の九番歌は叙景的な独詠歌なので、贈歌の役割を担えない。そのため、返歌は、主に本歌の下の句の発問に着目したのだと考える。左歌は晩秋になったら意味がない、右歌は時雨ではなく佐保姫が紅葉を染めたと、本歌に対して反論或いは揶揄の形式となっている。本来贈歌にはならない歌を返す場合は、本歌の内容を「ツツコム」方が始まりやすいであろう。そして、こうした「ツツコミ」も大体一般論の角度から出発しており、個人的な感情や意見が希薄である。代表的な表現は、前記の七番歌及び二十番歌、

20 大方のもの思ふ時にしぐるるを秋の空とは見ゆるなるらん

に見られる「大方の」であろう。

左歌の「秋」について、岸本氏は「秋」が「飽き」と掛かるとし、下の句を「美しい紅葉も秋が終わるにつれ人に飽き果てられては甲斐がないということ」と解釈している。しかし、下の句が受ける主体は「山の端」であり、紅葉ではないと思う。それに、「紅葉が人に飽き

られるのは甲斐のないこと」という解釈が分かりにくく、「人」が具体的に誰を指すのも漠然として分かりにくい。また、十七番歌、

17 薄き濃き色の限りぞ佐保山は秋果つるまで浅きと見えそ

にも「秋果つる」という表現があり、ここでは岸本氏は「飽き」に掛けると解釈しておらず、単に「秋が終わる」と解釈しているので、十番歌も十七番歌と同じく、「飽き」のニュアンスを含まないのである。そこには、本歌合における叙景歌に対して叙景歌、人事の歌に対して人事の歌を返すという返歌の原則があると考ええる。

以上の原則は、京極御息所歌合にはないようである。例えば、前節に挙げた十番歌とその返歌のように、春日社の巫女たちを花に譬えるという情景的な描写を施した本歌に対し、左歌は、『京極御息所褒子歌合注釈』⁽¹²⁾（略称『注釈』）によれば、本歌の「花とも見ゆる」という、花の以外にも見えるとの含みとも読める表現の隙を突いて、来春は花そのものをかざしてくるのだから、花以外には見えないに違いないと答えたという。また、来春また来ること自体は決定されていないが、来春の御幸の実現を予想しつつ、宇多院の京極御息所に対する寵愛の末永いことを祝福しているという。つまり、左歌の詠者は、自分を本歌の贈り相手の「禱部」に見立てたのである。返歌の手法については、やはり「ツツコミ」をしたと考える。ただし、当該歌では一般論ではなく、主観を優先にしたのである。そのため、恋歌の常套的返歌だと指摘され、本歌が返歌の詠者、即ち女官を賛美しているという誤解を招いたようである。

右歌に対してもそう言えよう。一見では、春霞があるから、巫女を花に見間違えたと言っているが、それだと巫女に対して失礼に当たる

であろう。やはり、詠者は自分を「禱部」に見立て、謙遜をしていると考えられる。また、「あだ」という表現を用いて、本歌の主観的な感情、即ち仮初な気持ち乃至恋愛と関係する「あだ心」、即ち浮気心にまで暗示していると考ええる。それこそ贈答歌本来の形式とも言えよう。やはり、京極御息所歌合の詠者の女性たちは、姫君たちと比べて、日常的に贈答歌を詠む経験が一段に豊富のようで、返歌の技巧を發揮できたのであろう。その反面に、本歌の表現を軽視する傾向が見受けられ、右歌は正にその典型であり、本歌の「花」以外の表現をほとんど摂取しなかった。また、本歌の二五番歌とその返歌、

15 春ごとに君し通はば春日野の八千代の松も枯れじとぞ思ふ(本)

16 春日野に春は通はむわがためにまつ心ありて齡増すなり(左)

17 春日野のまつしかれずは御手洗の水も流れて絶えじとぞ思ふ

(右)

とあるように、本歌が「君通ふ」と「松枯れじ」という二つの表現に対し、左歌はこの二つの表現を踏まえたが、右歌は「松枯れじ」としか触れておらず、「御手洗の水」という全く別の表現を加えた。『注釈』によれば、右歌は、そもそも宇多院賛美という本歌の主題から外れており、むしろ春日社の永続性を寿いでおり、そのため他書所伝⁽¹³⁾では本歌と関係なく、単独に収録されているのだという。

本歌合の場合、本歌の表現は重んじられている。それだけに止まらず、返歌の表現でさえ重視され、その後の本歌の選定及び返歌の創作に反映されているようである。それは前文で言及した本歌合の独特な構造、即ち表現による連鎖だと考え、詳細を次に述べる。

四 表現の連鎖

本歌合における表現の連鎖に関して、前記の四番切りは最も顕著な箇所である。まず、本歌の九番歌の「時雨ふりて染め」という時雨が紅葉を赤く染める表現に関して、実は五番歌、

5 聞く人の袖さへひつる鹿の音に秋の時雨のふり出てぞなく

に既に「時雨のふり出て」という近似表現があった。岸本氏によれば、「振り出づ」は、紅の染料を溶かした水の中で布を振って染める意として、紅葉や紅涙を連想させるといふ。恐らく、五番歌の当該表現が再び注目されたので、九番歌を本歌として採用したと考える。

そして、十番歌に関して、前述のように、「秋果て」という表現は十七番歌の「秋果つる」と対応している。つまり、十七番歌も十番歌の表現を再利用したのだと考える。

続く十一番歌に関して、「佐保姫」という珍しい表現を用いた。実は、佐保姫は春の女神で、ここでは適切ではなく、むしろ、秋の竜田姫の方が適切だと考える。用例として、『古今和歌集』秋歌下・二九八、

秋のうた

かねみの王

たつたひめたむくる神のあればこそ秋のこのはぬさとちるら
め

とあるように、竜田姫を秋の女神として詠んでいる。一方、佐保山の紅葉について詠んだ歌は、『古今和歌集』には、

● 秋歌下・二六五

やまとのくににまかりける時、さほ山にきりのたてりけるを

見てよめる

きのとものり

たがための錦なればか秋ぎりのさほの山辺をたちかくすらむ

● 秋歌下・二六六

是貞のみこの家の歌合のうた

よみ人しらず

秋ぎりはけさはなたちそさほ山のははそのもみぢよそにても見

む

● 秋歌下・二六七

秋のうたとてよめる

坂上是則

佐保山のははその色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな

● 秋歌下・二八一

題しらず

よみ人しらず

さほ山のははそのもみぢちりぬべみよるさへ見よとてらす月影

● 賀歌・三六二

千鳥なくさほの河ぎりたちぬらし山のこのはも色まさりゆく

とあるように多数存在するため、右歌は恐らく佐保姫を佐保山の山神と誤解し、そこで紅葉と結び付いてしまったのであろう。これは右方が稚拙だった証拠となる。当該箇所の誤用を戒めるように、次に佐保山の紅葉を題材とした十二番歌、

12 佐保山のははその紅葉散りぬべみ夜さへ見よと照らす月影

が本歌として選定されたのだと推測する。

こうした十二番歌に対して、返歌は、

13 久方の月なかりせば佐保山の紅葉は夜の錦ならまし(左)

14 月影のさややく見ゆる佐保山の紅葉を風にかせせずもがな(右)

とある。左歌について、岸本氏による解釈は、「ならまし」が二句「月

なかりせば」と呼応して反実仮想を表すという。反実仮想を使う点においては、二番歌、

2 紅葉せぬ秋の山へのあらばこそ月の光をたづねても見ぬ

も同じである。二番歌では「紅葉せぬ」という紅葉がない状況を想定しており、その場合、月を觀賞するしかないという。一方、当該歌では「月なかりせば」という月影がない状況を想定し、その場合、紅葉が夜の錦のように、誰も知られないという。つまり、二番歌と十三番歌は呼応し、月影と紅葉の関係について、仮想の対象を置き換えて詠んでいるように見える。また、一番歌の「月影」という表現も、十二番歌末尾の「月影」と関連していると考える。そして、「佐保山」という話題は、また次の本歌の十五番歌に続く。

このように、本歌合には表現の連鎖が見受けられ、前の歌の表現が後の歌に影響していく形となっている。本節で言及した連鎖は氷山の一角に過ぎないが、他の連鎖に関してここでは割愛する。表現の連鎖の存在は、やはり本歌合が表現を重視する方針と深く関わっていると考ええる。また、連鎖の実現は、本歌合が即興的に進行されていたことを証明できるであろう。それに対して、京極御息所歌合の場合は、本歌が延喜二十一年三月七日に忠房に献上され、歌合自体が『大成』によれば五月に開催され、返歌がその間に創作されたという。返歌には伊勢による代作もあることが判明されたので、即興的ではなく、披露会のような行事的に行われたのだと考えられる。その故に、京極御息所歌合と比べて、本歌合における本歌と返歌の繋がりはかなり強いわけである。また、本歌合における表現の連鎖は、顕明なところがあれば、微妙なところもあるので、即ち連鎖にはばらつきが存在する。そ

れも、本歌合は即興的である故に、詠者の関心や進行の状況に応じて偶然性があるためだと考える。そこで問いたいのは、本歌合における返歌合という歌合の形式の本質である。

五 本歌合の本質

以上の考察を踏まえて、返歌合の本質について検討してみたい。普通の歌合と比べて、返歌合の最も特徴的なのは、本歌の存在である。普通の歌合の場合は、歌題が存在する。陽成院一門関係の歌合の例を挙げれば、陽成院歌合(夏虫恋)の歌題は「夏虫恋」、陽成院歌合(惜秋意)の歌題は「惜秋意」、陽成院親王二人歌合は「寢覚めの恋」と「暁の別れの恋」である。こうした歌題は確かに詠歌の題材及び表現の範囲をある程度に限定するが、歌の感情自体を特に干渉しておらず、詠者次第となっている。一方、贈答歌の場合は、題材と表現をあまり拘らず、贈歌した詠者の感情に忠ることが肝心となる。それらに対して、返歌合の場合は、本歌の存在により、返歌が表現と感情両方面において本歌に対応しなければならぬという二重苦の状態に陥ってしまう。実際、京極御息所歌合と本歌合の二例の返歌合を見る限り、京極御息所歌合の返歌は返答する詠者の感情、本歌合は本歌の表現を重視する傾向があり、逆に表現と感情のバランスを取れた、模範とも言えるほどの返歌はほとんど見当たらないのである。それは返歌合の難しいところであろう。

しかし、逆に言うと、本歌という重い制約の存在は、返歌を創作す

る際に強力な補助にもなれると考える。つまり、本歌の表現を撰取し、その感情に応じれば、返歌をそれなりに詠めるのであろう。少なくとも、漠然とした歌題と比べて、本歌のある方が返答しやすいと思う。勿論、贈答歌の練習にもある程度になれるのである。従って、本歌の存在は、優れた返歌を導き出すとするよりも、まず返歌の創作自体を補助するという役割を担っていると考える。もつとも、前文に掲げた陽成院歌合（夏虫恋）の初番は、明らかに『古今和歌集』五四四番歌を参考にした歌であり、『古今和歌集』五四四番歌を本歌合における「本歌」に当てることも可能である。従って、本歌合は、陽成院歌合（夏虫恋）の初番と比べて、ただ返歌合を採用したという違いがあり、本質的には陽成院関係の歌合の形式に沿った、幼い姫君たちに相応しい、完成度が一段低い歌合擬きだと言えよう。

このような本質を持つ本歌合は、恐らく陽成院一門における和歌の教育現場だと推測する。実際、京極御息所歌合も本歌合も、若い女性を主な詠者とする歌合であり、彼女たちの歌の品質が当然専門歌人やベテラン歌人に及ばないが、歌自体を賞美することが第一目的ではなく、彼女たちの和歌創作活動を補助しつつ、その和歌の素養を培うためであろう。京極御息所歌合が宇多院を絶対的な主役として崇敬している一方、本歌合の場合、陽成院を言及することさえほとんどないの

で、教育の目的はより一層純粹であろう。後世には返歌合という形式の歌合がほとんど見られない。やはり、教育を目的とする返歌合は、文学としての完成度が低く、あまり公開や記録に値しないのであろう。それにもかかわらず、姫君を教育するための本歌合がきちんと記録され、多くの伝本が今日まで伝わっている

るということは、やはり、文学史における陽成院一門の存在を軽視できないのであろう。

終わりに

本歌合は陽成院一門関係の文学活動の伝統を継承しており、一門の独特な感性に沿い、即興的、随意的に行われた私的歌合だと推測する。本歌合を通して、元良親王の娘たちに和歌の教養を教えることは恐らく主要な目的だと考える。陽成院の残照にはなるが、後世に『大和物語』や『元良親王集』などの陽成院一門が登場する文学作品の成立へと繋がると考える。その意味では、本歌合は陽成院一門の親睦の証だけでなく、陽成院一門の文学にとつて、欠かせない一環となっているのであろう。

更に広く言えば、京極御息所歌合と本歌合のような若い女性を教育するための返歌合の開催は、女性に対する和歌乃至文学の教育の浸透を示しているであろう。後に、『大鏡』で語られた『古今和歌集』を全部暗記した村上天皇の女御芳子や、女流文学の巨頭である紫式部と清少納言のような高度な文学素養を持つ女性たちの登場と関係づけられるかもしれない。女流文学の黎明の一つとしても、本歌合には刮目すべきである。

注

本稿において引用した和歌は、特に断らない場合は『新編国歌大観』による。陽成院一宮姫君歌合と京極御息所歌合は『陽明叢書 国書篇 平安歌合集 上』（思文閣出版、一九七五年）所収の影印の十巻本、陽成院歌合（夏虫恋）の本文は『古筆学大成 第21巻』（講談社、一九九二年）所収の影印の廿巻本の伝藤原忠家・俊忠筆柏木・二条切を用いて、適宜に漢字を当てて校訂を加えたものである。各歌の歌番号は、便宜上、『新編国歌大観』の歌番号と一致させた。

- (1) 萩谷朴『増補新訂 平安朝歌合大成 第一巻』（同朋舎出版、一九九五年）。
- (2) 蔵中さやかほか『和歌文学大系48 王朝歌合集』（明治書院、二〇一八年）所収 岸本理恵「陽成院一親王姫君達歌合」。
- (3) 十巻本と廿巻本という二系統の底本がある。両者の差異が微少。
- (4) 国立天文台歴史計算室 (<https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/>) による。
- (5) 『新訂増補国史大系 第五十八巻 尊卑分脈 第一篇』（吉川弘文館、一九五七年）による。
- (6) 歴代天皇の年齢（実年齢）の順位…一位上皇さま（平成）、二位昭和天皇87歳、三位後水尾天皇85歳、四位陽成天皇80歳。
- (7) 山下道代『陽成院―乱行の帝―』（新典社、二〇〇六年）。
- (8) 『国史大辞典』ジャ・パンナレッジ版による。
- (9) 十・十巻本。廿・廿巻本。書…書陵部本。陽…陽明文庫本。
- (10) 『新訂増補国史大系 第十一巻 日本紀略後篇 百鍊抄』（吉川弘文館、一九二九年）。

(11) 佐藤道夫ほか『和歌文学大系47 和漢朗詠集・新撰朗詠集』（明治書院、平成二十三年）。

(12) 西山秀人・岡田博子・小池博明（順不同）「京極御息所歌合褒子歌合注釈（一）、（二）、（三）」、『上田女子短期大学紀要』第二七号（二〇〇四年一月）、第二八号（二〇〇五年一月）、第二九号（二〇〇六年一月）。

(13) 袋草紙・八〇九／袖中抄・五五三／夫木和歌抄・雑部・九六八七。

(こ) こう、広島大学大学院人間社会科学研究所博士課程後期在学

The essence of the Japanese poetry contest held by Yozei, the Retired Emperor, in which his First Prince's daughters participated: A contest of poetry in return

Yuhao GU

Key Words: literature of Heian Era, poetry contest, Yozei the Retired Emperor, poetry in return

A famous Japanese poetry contest was held by Yozei, the Retired Emperor, in which his First Prince's daughters participated, in 948. As a legendary emperor and the oldest emperor at that time, Yozei had been far from politics for nearly 60 years when, in the year before his death, he called his granddaughters to join a friendly family poetry contest, the theme of which was the sentiment of late autumn. Of the several poetry contests held by Yozei in which mainly his family and vassals participated, this was the last. He being a talented poet, his poem was recorded in the most famous poetry collection, the "Ogura Hyakunin Isshu." This paper aims to analyze the relationship between this poetry contest in which his granddaughters participated and other poetry contests held by Yozei, and to examine the structure of the contest of poetry in return. The purpose of this study is to identify the essence of this contest and to demonstrate its significance in Japanese literature.